

亡くなったあとのサポートまで 安心して住み続けられる地域へ

高齢になってひとり暮らしを続けていけば、心配なことはどんどん増えていきます。そんな住民の方の不安の声を聴いて、文京区社会福祉協議会が立ち上がりました。社協が終活サポートを始めて1年、見えてきたのは、地域を愛する住民の思いに応えるという社協の存在意義でした。



社協マスコット きく文(きくもん)

取材協力 ▶ **近藤秋穂さん** ● 社会福祉法人 文京区社会福祉協議会 地域福祉推進係
地域福祉コーディネーター

こんどうあきほ

2011年に児童福祉系の入所施設職員として勤務後、2015年に文京区社会福祉協議会に転職、地域福祉推進係にて地区担当地域福祉コーディネーターとして勤務。2019年文京区単身高齢者等終活支援事業「文京ユアストーリー」担当となる。

《あなたらしい人生のしめくりを共に》

こんな謳い文句とともに、人生のしめくりをサポートする取り組みとして、文京区社会福祉協議会が昨年6月に始めたのが、「文京ユアストーリー」だ。

ちょっと変わった名称のこの事業について、文京区社会福祉協議会地域福祉推進係の近藤秋穂さんが解説する。

「身近に頼れる人がいなくても、住み慣れた文京区で安心して暮らし続けられるよう、元気うちに備えておき、亡くなられたあとのことまで一体的にサポートする取り組みです。「ユアストーリー」という事業名には、『これまで、そしてこれからの人生について、あなたの声を聞かせてください』という思いが込められています」(近藤さん・以下同)

もともと文京区社協は、町会や自治会などを単位とする小地域内の交流や助け合いを進める「小地域福祉活動」に力を入れていた。その活動をする中で、身近に頼れる人がいない高齢者が「終活サポート」を求めていることを知った。

「小規模のエリアに地域福祉コーディネーターを置き、地域の人々が集う場を設けて交流や活動を促進する中で、住民の方々から話を聞く機会が多かったんです。その過程で、身近に頼れる親族がいなくて、安心して暮らせないという高齢者が文京区にもいることが、少しずつ分かってきました」

集う場で分かった終活サポートを求める声

ある日、高齢男性がNPOの発行した終活サポートのチラシ

シを複数持って交流の場を訪れ、「信頼できるのはどこですか？」と地域住民に尋ねていた。民間でもたくさんサービスが提供されているが、心配なニュースなどもあり不安に思ったという。

「すると、この男性の他にも、連れ合いに先立たれて子どももない方が、『もう何十年も文京区に住んでいるけど、これから先のことを考えたら、田舎の親類を頼って帰るしかないのかな』と不安がる声も上がりました。身近に頼れる人がいない方が社会とのつながりが薄いまま高齢化すると、認知症等の発見が遅れ、住まいがごみ屋敷になってからようやく社協に相談がはいるなど、さまざまな課題を抱えてしまうケースが少なくありません。そうしたリスクを回避して、身近に頼れる親族がいなくても安心して暮らすことができ、社会資源とも適切につながるサポートはできないかと検討を始まりました」

すでにこうした事業を行っていた福岡市の社協を視察し、法律面では弁護士や司法書士の力を借りて制度設計を進め、昨年6月に文京ユアストーリーの事業開始にこぎつけた。

対象となるのは文京区内に住む、原則として70歳以上で、明確な契約能力があり、身近に頼れる親族がおらず、生活保護を受給していない人だ。具体的なサービス内容は、原則として1か月に1～2回の定期電話連絡、3か月に1回の定期訪問を行い、入院時や転居時など手伝いが必要になったときのサポートを行う。

さらに「人生のしめくり」の手伝いとして、亡くなったあ